2009

色彩感覚を豊かにする絵本

Picture book develop sense of color

AD 12　川尻　愛
指導教員　佐久間　善典

1.研究目的

色彩感覚は生まれながらに持っているものではなく、乳幼児期の視覚体験によって獲得されることが独立行政法人産業技術総合研究所、脳神経情報研究部門、認知行動科学研究グループの研究により明らかになった。子供に色を与えるときに男の子は青、女の子は赤と区分しがちだが、大人の固定観念で子供の色彩感覚の発育を妨げることのないように、幼時期にはなるべくたくさんの色を与えるべきだと考えられる。そこで、子供により多くの色に触れることのできる物を研究提案する。

2.調査と分析

移行期にはそれまでの経験から応用したものを想像するため、主に5歳までの子供を研究対象に当てることにした。

生後間もない赤ちゃんが興味を持つのは、明るさと運動と感触だといわれる。つまり、新生児は光と動くものに反応し、それを触って確かめようとする。色を識別する能力がでてくるのは、生後２～３か月が経過してからで、一般的には黄色を見ると一番喜び、白やピンクなどの明るい色を好み、反対に青や黒といった暗い色にはあまり目を向けない。生後６か月ぐらい経つと、赤、青、黄、緑などの原色を識別できるようになり、形よりも色に関心を示すようになる。個人差はあるが、「幼児の好む色」の調査によると、一番好まれる色は黄色で、白、ピンク、赤と続く。そして成長するにつれて青や緑が加わってくる。ここからわかるように、色の好みは年齢によって変化していき、使用する色を慎重に選んでいく必要がある。

3.コンセプトの立案

「より多くの色に触れられる本」

色を表現することに最も適した素材は紙であること、紙でできた玩具で子供が簡単に扱えるものということで、本を作ることにした。

「何度でも楽しめるもの」

色彩感覚はすぐに身に付くものではない。そのため常用性が求められる。

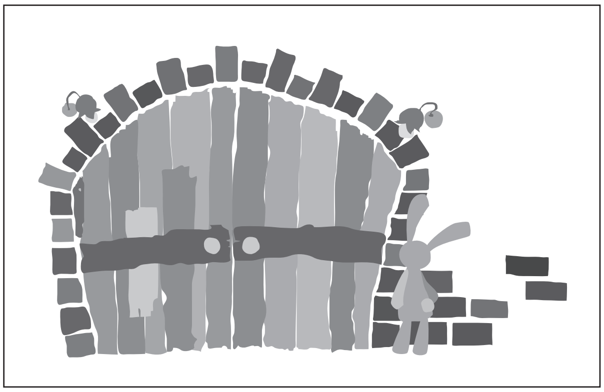
4.デザイン展開

・色を見てもらうために
主線を省くことで形よりも色を強調した。

・ストーリー
赤しか知らない主人公が青と黄色に出会うことにより、色の視野を広める。

・色のバリエーション
色相だけでなくトーンの差も多く取り入れた。

5.完成図



6.結論

色をテーマにした作品だったので仕上がりの色には大変気を使った。パソコン画面と印刷物の色の違いを修正する作業が厄介だった。「より多くの色に触れる」という点ではできたと思うが、常用性にはまだ欠けるところがある。本を読んだ後に応用ができるような要素も考慮すべきだった。
実際に使ってもらう検証を十分できなかった点が残念だ。

7.参考文献

産総研,2004,「乳幼児期の視覚体験がその後の色彩感覚に決定的な影響を与える」(http://www.aist.go.jp/index_ja.html,2006.6.25)

桶村久美子,2006,「おもちゃは原色がいい?」(http://osaka.yomiuri.co.jp/shikisai/sz60407a.htm,2006.6.25)

小林重順・道江義頼,1975,「応用色彩心理学」誠信書房